

はじめに

厚生労働科学研究費補助金による難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）『小児期遺伝性不整脈疾患の睡眠中突然死予防に関する研究』（平成 29 年）の研究成果を報告申し上げます。

若年者の原因不明の突然死においては遺伝性不整脈の占める割合が 21～26 % と考えられています。日本の院外心停止（OHCA）のうち原因不明で予後不良（死亡または脳死）の頻度（対 10 万）は乳児、幼児、小学生、12-19 歳で各々 40.4、3.3、1.0、1.2 になります（消防庁データ）。OHCA が睡眠中に発生する割合は、乳児 68%、幼児 32%、小学生 10%、12-19 歳 5% です（九州学校検診協議会データ）。2012 年には日本全国で睡眠中に計 355 名の小児が予後不良に陥り、うち遺伝性不整脈による事故が 75～92 名に起きていたと推測されます。深夜睡眠中 OHCA の救命は困難です。遺伝性不整脈疾患の睡眠中の症状出現防止は次世代を担う子どもの健全育成と心身障害発生予防の重要な柱と考えられます。

健常小児と遺伝性不整脈患児のホルター心電図、終夜睡眠ポリグラフィー検査を行い、心電図指標（QT 時間、心室不整脈出現）と自律神経機能、脳波・睡眠深度の解析から、遺伝性不整脈疾患の睡眠中症状出現予測因子を決定し遺伝学的検査を含めた患児情報から睡眠中突然死予防のための治療的介入指針を作成するのが本研究の目的です。

本研究を採択していただきました国立保健医療科学院の関係者の皆様方、および協力していただいています研究分担者の皆様に心よりお礼申し上げます。本研究が次世代を担う子どもの健全育成と心身障害発生予防に繋がることを証明できるよう努力を重ねて行きたいと考えています。

平成 30 年 5 月

研究代表者 吉永 正夫